

目にはドラゴンズ・ブ  
レスを、歯にはフルオ  
ロ酸を、主人公には希  
望を騙る底なしの絶望  
を

キリコンだねえ、分かるとも！

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

なろうで読んでたら今更ながらアニメ化したことに気がつき、アニメを見た作者。

しかし、好きだった頃と今とでは、感性が異なるため主人公アンチ系の話を妄想したのでここに記す。

意味を知らない言葉を平気で使うウコンマンなので文章になっていない。イライラする。そんな方々にはブラウザバックをおススメします。

時系列を気にしていなかったので、直せたら直します。

# 目次

終わりの始まりがスタートする | 1



# 終わりの始まりがスタートする

「……やはりこの世界でも、無詠唱は異端か」

僕は考える。どうしたら他力本願ファイヤーでシン||ウォルフオードの動きを阻害しつつ、平穏な異世界スローライフを満喫できるかを。

この世界に神はいない。故にどこぞの触覚付きピンキーヘッドよろしく過去に戻って世界の常識を改変し、創神教なるわけわかめな宗教とは別の造ったが、バターフライ・エフェクトでどれくらい鱗粉を撒き散らし、運命はどこまでカーリングしてくれるだろうか。

僕は計算する。かつての世界では、1+1||2は絶対であり、1||1でしかなかったが、この世界では魔法が存在する。彼の世界ではヒトは世界を彷徨い歩く影法師、哀れな役者に過ぎず彼らの誕生は奇跡でもなければ偶然でもなく、ただの必然。増え過ぎた彼らは、己が住む星の周りの星にも手をかけ始めたという。知らんけど。

私は信じた。ヒトは星のサイクルの一部である事を。人間は傲慢な生き物だ。その傲慢さはやがて彼らを高みに連れてゆく。ただ、あらゆる生あるものの目指すところは死であるため、その高みへ登れる人間は少ない。登ったとしてもその先にも後にも道は

なく、彼らの重さで地に落ち大地へ帰るだろうと。ただの思春期に増産しがちなぶらつく〓〓ひすとりいですね、死に絶えろフォーミー。

考える。この世界で目立たないように、そしてこの世界の主人公ことシン〓ウオルフォードのご都合主義的痛々しい異世界無双を、その夢のような時間を完膚なきまでに蹂躪するために僕がすべきこと。アレの魔法革命は自分一人では止められない。というかこの世界の強制力・修正力に抗うのは、いささか無理がある。故に主な対象は学友の方々からその周りの大人、教師と広げていこう。とりあえず当面は〓シリ〓フォ〓ン〓クロード〓や〓アウグスト〓フォン〓アルスハイド〓に重きを置こう。彼らとの出会いこそアレの増長を加速させルにつながったんだ。

僕は行動した。オリベイラ様たちと仲良くなるために。個人的に主人公勢の声優陣よりも魔人勢の声優陣の方が好きなのだ。森川さん真綾さん夫婦（アニメの話だよ）や津田さん、大原さやかさんなどフアヴォリテライクなのです。最高ですね。はい。

ところで最近、なろう系の侵食……進出率ヤバない？

まあ、とりまSクラスに入学したので（自分も何かと言ってご都合的チート）、これが

らもどんどん他力本願しつつ、主人公勢の足を引つ張つていこうと思つちよります。はい。原作もそこまで知らないので究極魔法研究会ことアルマジには幽霊部員として、席だけ置いておこう。

話を戻すけど、オリベイラ様さまさまだよ。ヤベエよあの人。確かに奥方への愛がグレナラガンしてるけども、そこじやない。前世の科学への理解度がばないです。どこぞの『<sup>空白</sup>』まで行かないにしろかなり広い範囲で吸収していく。まるで、吸引力の変わらないただ一つの掃除機のようなですよ。それをさらにあちらからこちらの世界の常識に組み替え書き換えどんどん効率化していく。ちよつとした都市伝説やくだらない雑学を本気で実験実証していくので、こええですはい。

「おもしろいね、ソレ」

とか言ってくれますけど、絶対そのままの意味じやないですしおすし食べたい。

これではもはや原作主人公が案山子にすらならないぜ。さすがに人類史上の負の遺産は作らないようにしているけど最悪暴走するようなことがあったり、夢のスローライフを邪魔するようなことがあればイワンことAN602をぶつける所存であります。

一応僕は、主人公の安全装置としてアンチ・ヘイト要員としてここにいるわけではどざされることはないと言つてもいいかもしれぬ。とりあえずまあ主人公勢最強なのはうざ…… 一個人として好ましくないと思つておりますので、魔人勢の主要人物はあちら

同様魔改造しましてどこぞのマガジンの魔神族の長までには行かないにしろほどほどに強くなったと思います。ズルはいくれない。

だって、好きな声優さんに中身は違うとしても怪我して欲しくありませんからね、はっはっは。

『というわけでしばらく平穏な学生生活を満喫してきまゝす。よつて、留守中は任せたよミリアくんにゼストくん!』

「いきなりどういう訳ですか?! きちんと説明してください」

「そうですよ! 留守の間、誰がシュトローム様の相手をすれば……」

「そんなの決まっているじゃないか! それともチミたち以外にいるとでも?」

「……。(脳筋しかいねえ)」

「では任せたま、《次元封鎖—ディメンジヨナル・ロック—》アンド《転移門—ゲート—》  
「ちよま、」

「やめなさい。今の私たちでは上位転移—グレーター・テレポーテーション—までしか使えません。シュトローム様なら行使されると思いますすが。」



斯くして魔人陣営と愉快なオリ主のスローライフが始まった。。。  
続け！